



[野菜部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

9. トマト「桃太郎みなみ」における低段の強摘果処理は秋季増収に効果的である

[要約]

夏秋雨除けトマト栽培用の「桃太郎みなみ」は、1～6段果房の着果数を2果に制限することで、高単価となる秋季に増収するため、収益の向上が見込まれる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 高冷地研究室

[連絡先] 電話 0867-66-2043

[分類] 情報

[背景・ねらい]

本県の夏秋雨除けトマト産地では、夏季の高温、強日射による裂果の発生が問題となっており、その発生が少ないとされる「桃太郎みなみ」の導入を進めつつある。一方、本品種は特に秋季に小果傾向で収量が少なくなりやすい。そこで低段の摘果数を増やす強摘果処理が草勢及び収量性に及ぼす影響を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 「桃太郎みなみ」の強摘果処理（1～6段果房を各2果、7段果房以降を最大4果に制限する。以下、強摘果区）は、慣行摘果処理（1～3段果房を計10果、4段果房以降を最大4果に制限する。以下、慣行区）と比較して、5段果房以上の茎径が太く維持される傾向がみられる（図1）。
2. 強摘果区の一果重は、慣行区と比較して重い。摘果により着果数が少なくなるため、7～8月の可販収量は減少するが、9～11月では増加する（表1）。
3. 強摘果区的全期間の可販収量は慣行区と同等だが、高単価となる9～11月の増収により粗収入が増加し、年間で1株当たり227円（強摘果区と慣行区の粗収入の差分）の増加が見込める（図2）。
4. 裂果の発生程度には、処理区間に大きな差はみられない（データ省略）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本試験は、高冷地研究室（真庭市蒜山、標高460m、黒ボク土壌）での雨除け栽培の結果である。
2. 本試験は、畝幅200cm、株間45cm、2条植え、斜め誘引1本仕立てで、養液土耕（自動灌水施肥システムGT6C11、（有）グリーンサム）による栽培結果である。
3. 令和5年は「桃太郎みなみ」の自根苗、令和6年は台木に「グリーンフォース」を用いた接ぎ木苗による結果である。
4. 粗収入は令和5年の真庭地域で取引された月別及び等級別の単価により算出した。
5. 強摘果とするために7月までの作業時間は増えるが、高単価が期待しにくく高温下での作業となる8月の収穫時間は減少する。



[具体的データ]

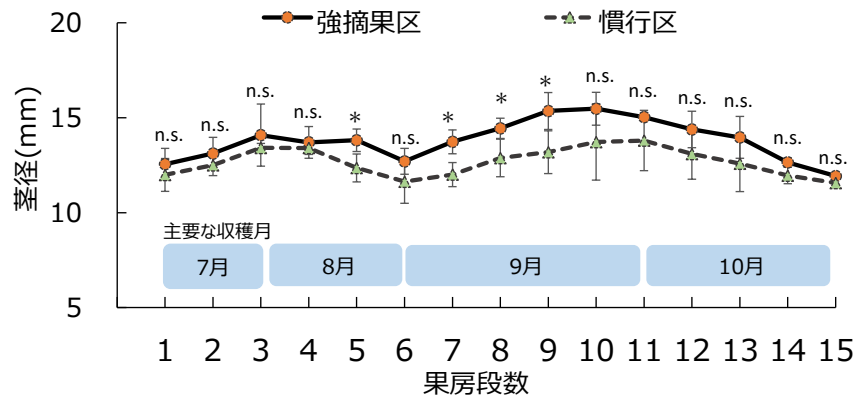


図1 「桃太郎みなみ」における強摘果処理が莖径に及ぼす影響（令和6年）

注1) t検定により、*は5%水準で有意差があることを、n.s.はないことを示す。エラーバーは標準偏差を示す
 注2) 栽培終了時に、花房直下の節間の長径を測定した

表1 「桃太郎みなみ」における強摘果処理が一果重、果数及び収量に及ぼす影響

試験年	処理区	可販一果重 ^z (g)			可販果数 (果/株)			可販収量 (kg/株)		
		7~8月	9~11月	全期間	7~8月	9~11月	全期間	7~8月	9~11月	全期間
令和5	強摘果	176	143	163	19	11	30	3.3	1.6	4.9
	慣行	157	130	149	24	9	33	3.7	1.2	4.9
令和6	強摘果	163	145	153	14	16	30	2.2	2.4	4.6
	慣行	148	137	143	16	12	29	2.4	1.7	4.1
分散分析 ^y	試験年	*	*	*	**	*	n.s.	**	**	*
	処理区	*	*	**	**	n.s.	n.s.	*	*	n.s.
	交互作用	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

注) 令和5年は自根株、令和6年は接ぎ木株を用いた

^z 収穫果から規格外品果及び100g未満の小果を除いたもの

^y **は1%水準、*は5%水準で有意、n.s.は有意でないことを示す

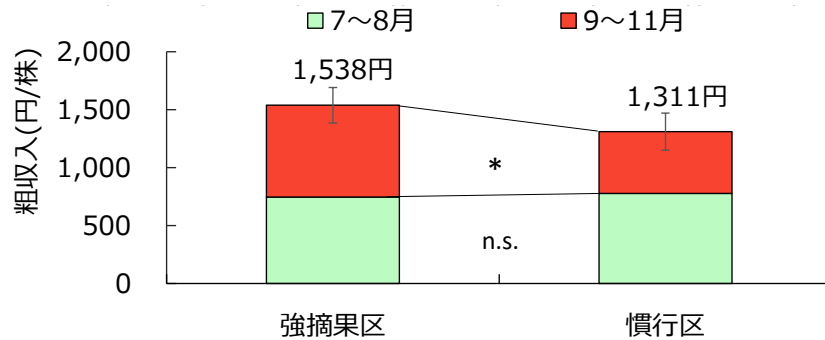


図2 「桃太郎みなみ」における強摘果処理が粗収入に及ぼす影響（令和6年）

注1) t検定により、*は5%水準で有意差があることを、n.s.はないことを示す。エラーバーは標準偏差を示す
 注2) カラム上の数字は合計金額を示す

[その他]

研究課題名：夏秋雨除けトマト栽培における安定生産技術の開発

予算区分・研究期間：農総セ連携事業促進費・令4～7年度

研究担当者：上田直國、山下尋揮、佐野大樹

関連情報等：1) 試験研究主要成果、[令3 \(49-50\)](#)、[令6 \(57-58\)](#)